

静岡県茶業振興計画

(2025～2028年)

2026年3月

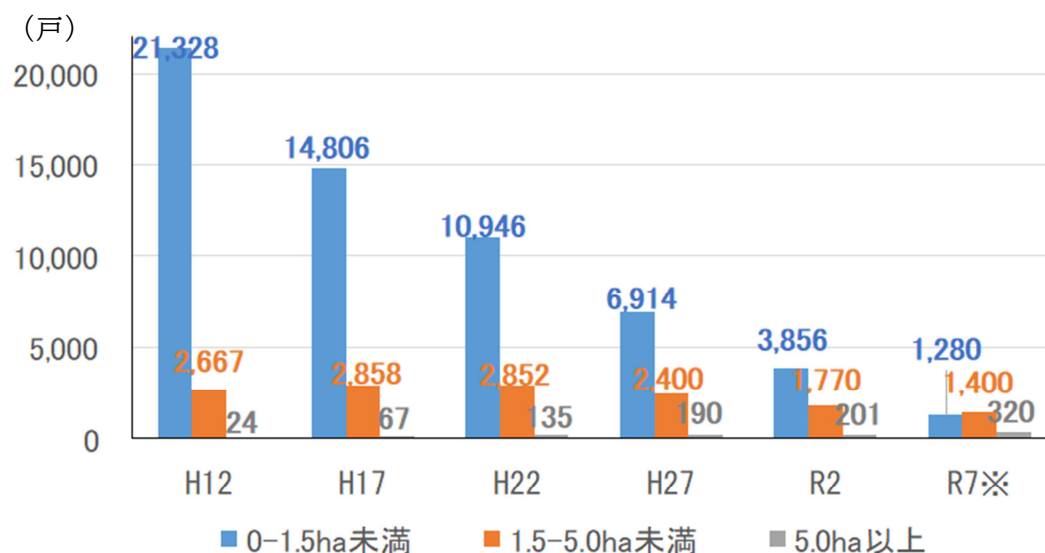
静岡県経済産業部農業局お茶振興課

I 茶業の現状及び消費動向

(I) 茶業の現状と消費動向

1 本県の経営規模別茶販売農家数

- ・ 本県の茶販売農家の数は担い手の高齢化・後継者不足等を背景に減少しています。
- ・ 1.5ヘクタール未満の小規模農家は大幅に減っているのに対し、5ヘクタール以上の大規模農家は増加傾向にあります。



(出典：農林業センサス、お茶振興課)

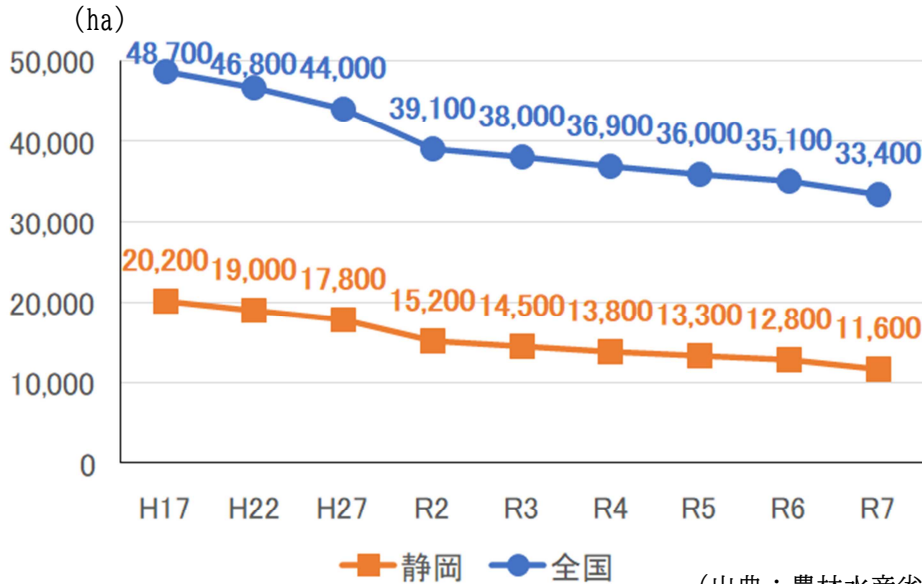
※R 7はお茶振興課の推計

2 県内の荒茶工場数の推移

※調査中。4月中に取りまとめ後、更新

3 茶園面積の推移

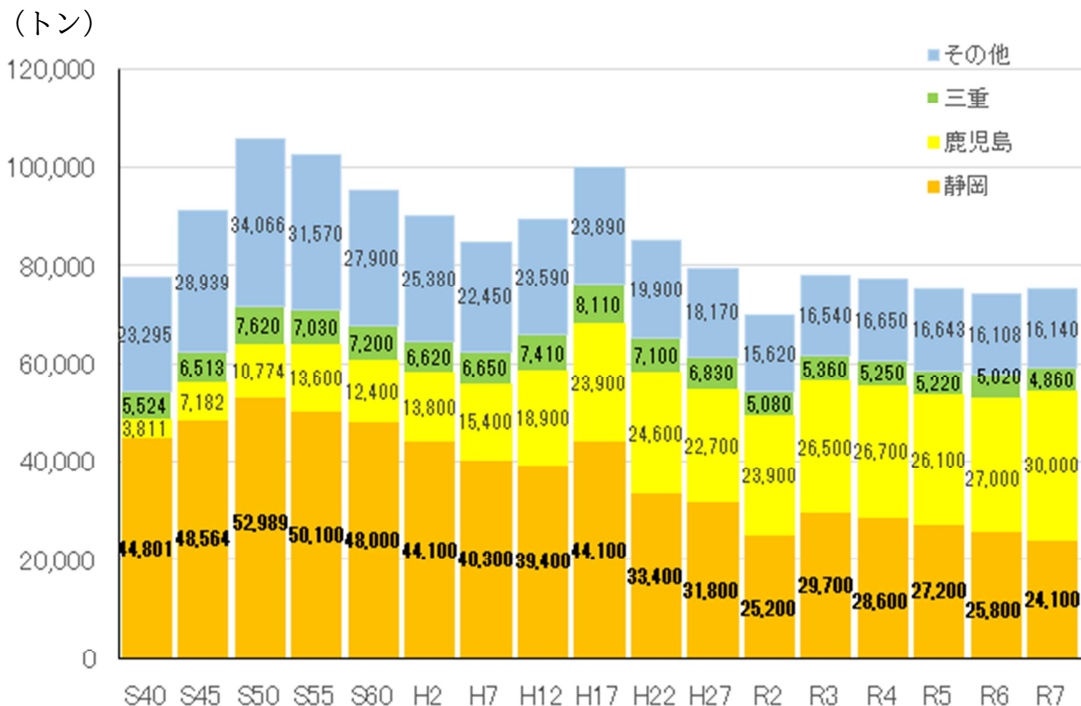
- ・ 本県の茶園面積は令和7年は11,600ヘクタールと、前年から1,200ヘクタール減少し、過去5年で最も大きな減少幅となっています。
- ・ 全国的にも茶園面積は減少しており、令和7年には前年から1,700ヘクタール減の33,400ヘクタールとなっています。



(出典：農林水産省 農林水産統計)

4 荒茶生産量の推移

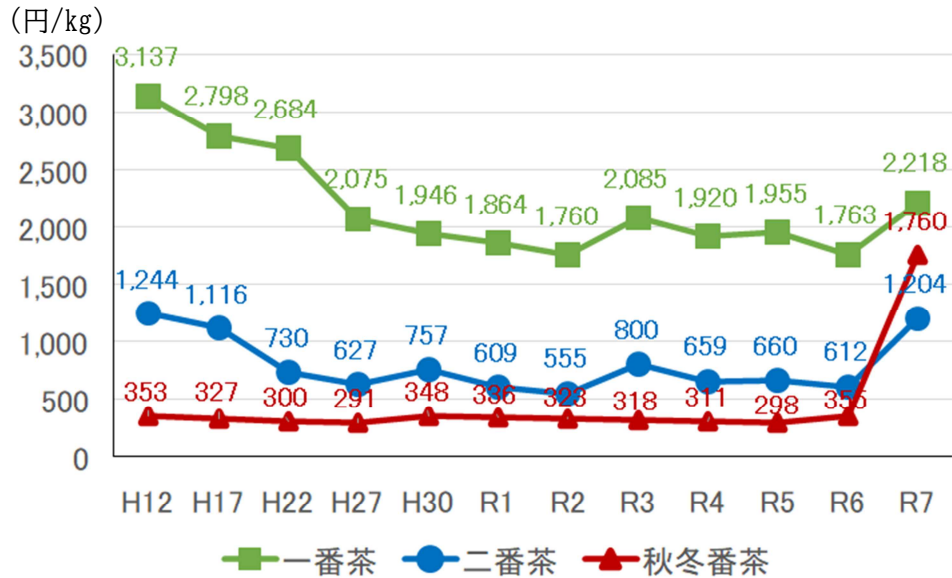
- ・ 生産者の高齢化や後継者不足等の影響により、本県の荒茶生産量は減少傾向で、令和7年は24,100トンと前年から1,700トン減少し、過去5年で最も大きな減少幅となっています。
- ・ 全国の荒茶生産量は近年は横ばい傾向でしたが、令和7年は前年比102%の75,100トンと4年振りに増加しました。



(出典：農林水産省 農林水産統計)

5 本県の荒茶価格の推移

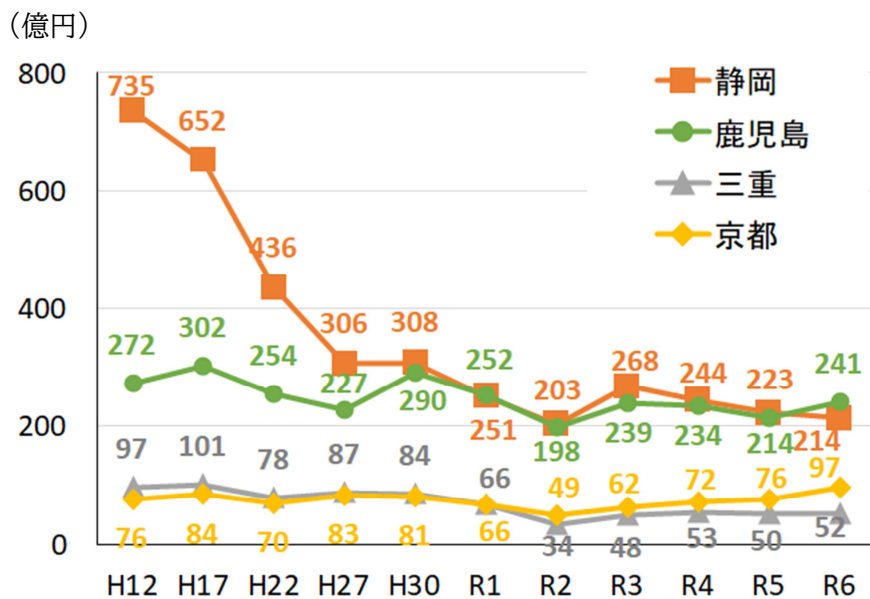
- 本県の荒茶価格は長期的に低迷していましたが、令和7年の荒茶価格は、抹茶ブームやドリンク原料の不足等を背景に、年間平均では前年比で約8割上昇し、特に秋冬番茶は、前年の約5倍と大幅に上昇しました。



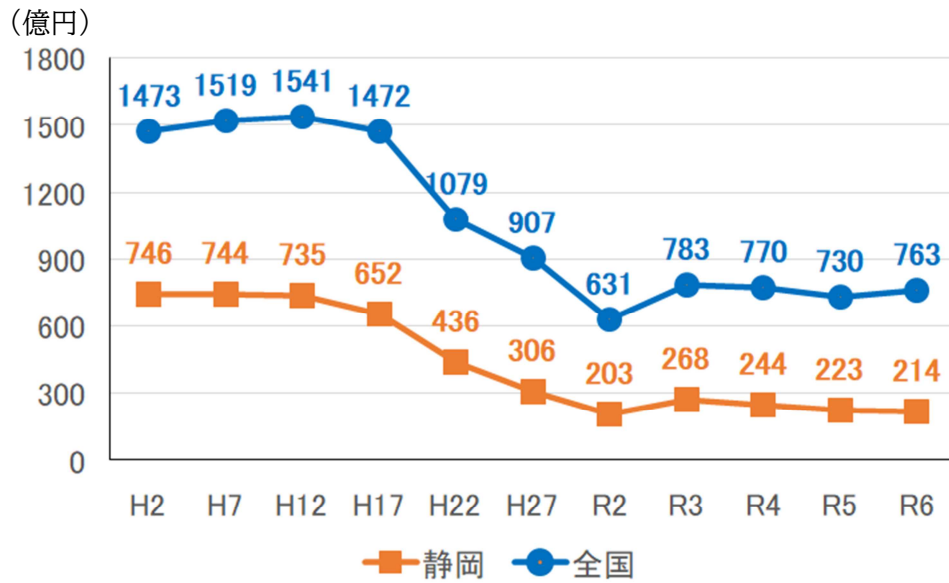
(出典：静岡県経済農業協同組合連合会)

6 茶産出額の推移

- 本県の茶産出額は、令和3年に持ち直したものの、再び減少傾向になり、令和6年は214億円と、鹿児島県に次いで2位となりました。
- 全国的にも低迷していますが、令和6年は前年より増加し、763億円となりました。



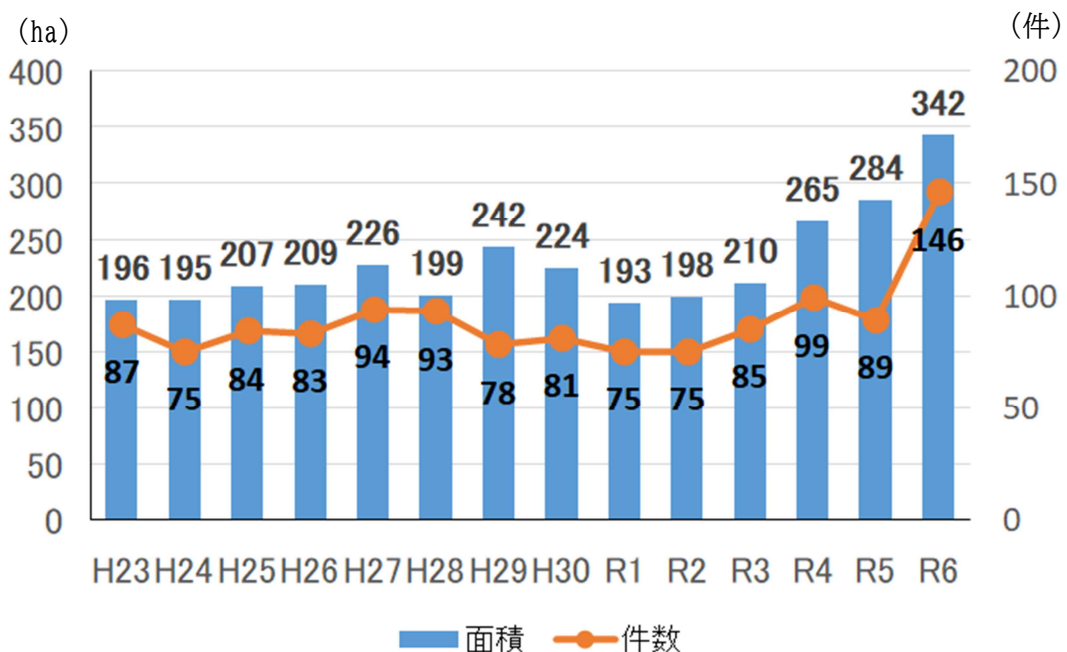
(出典：農林水産省 農林水産統計)



(出典：農林水産省 農林水産統計)

7 県内の茶の有機栽培の取組状況

- ・ 有機茶は残留農薬規制に対応しやすいため、輸出に適していると評価されており、特に欧州での需要が高くなっています。
- ・ 緑茶の輸出拡大に伴い、本県の有機栽培の取組は令和元年以降増加傾向にあり、令和6年には面積、件数ともに過去最高となりました。

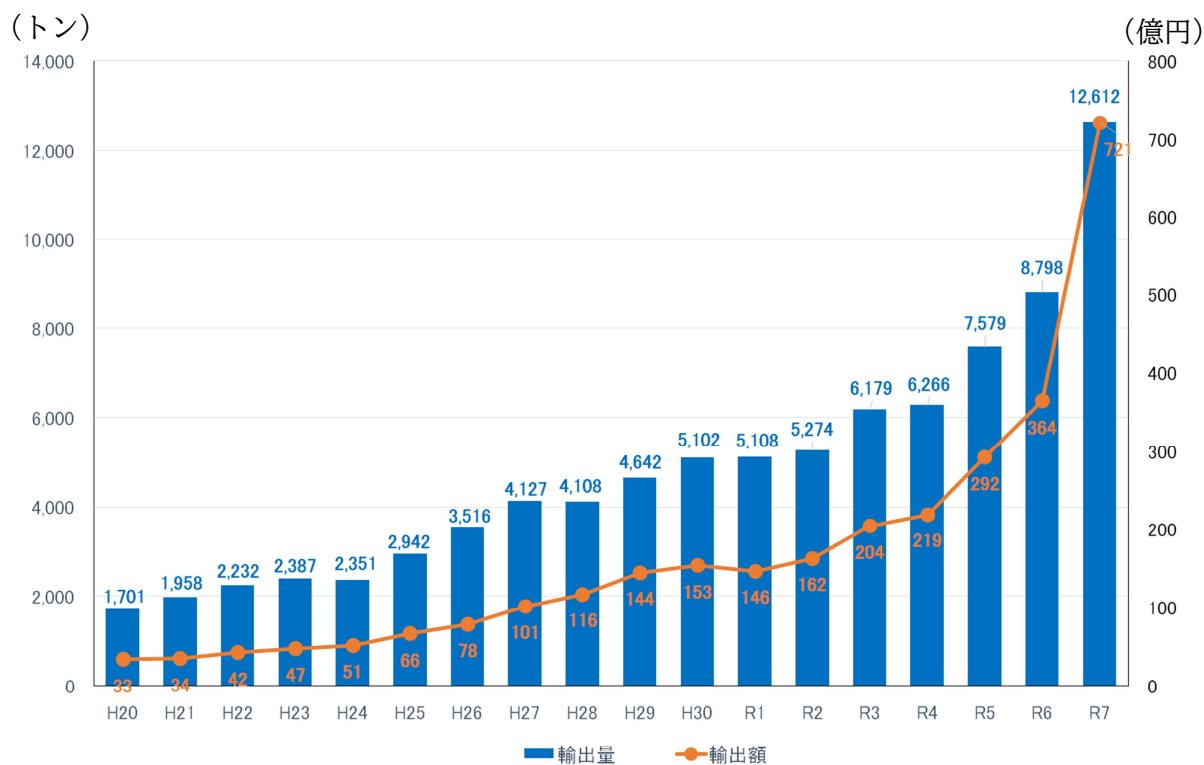


(出典：県食と農の振興課)

8 輸出動向

(1) 緑茶の輸出実績

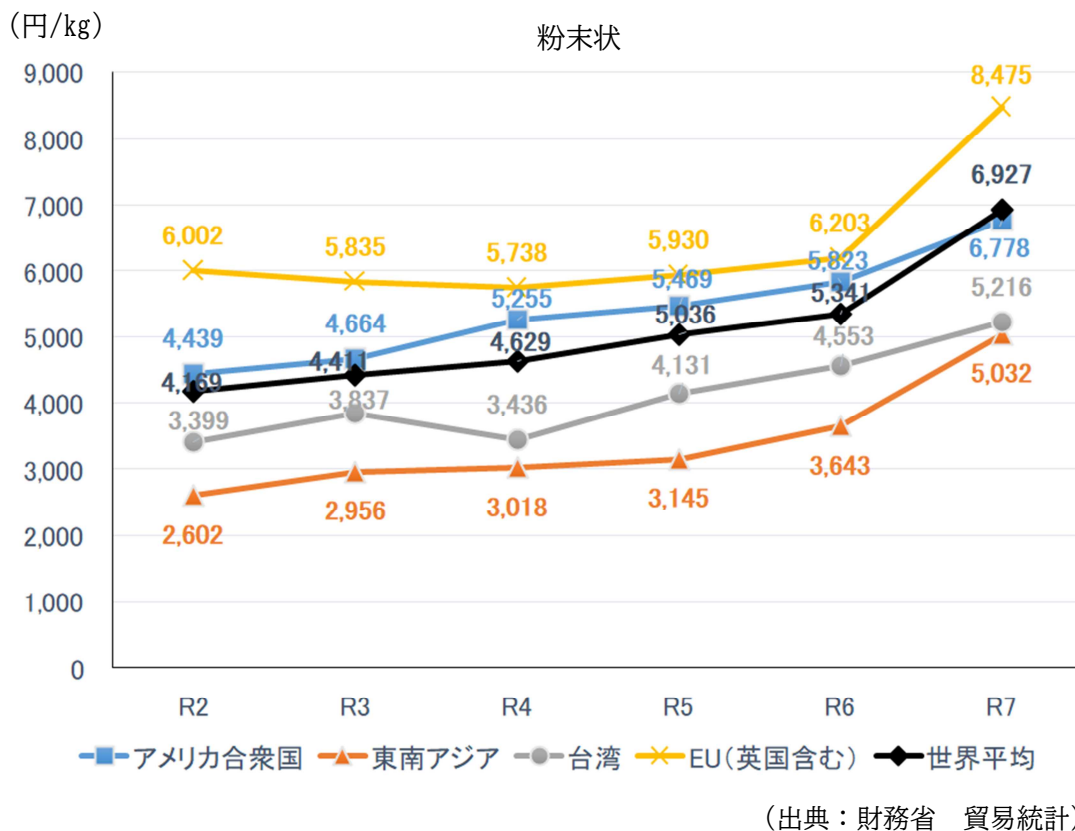
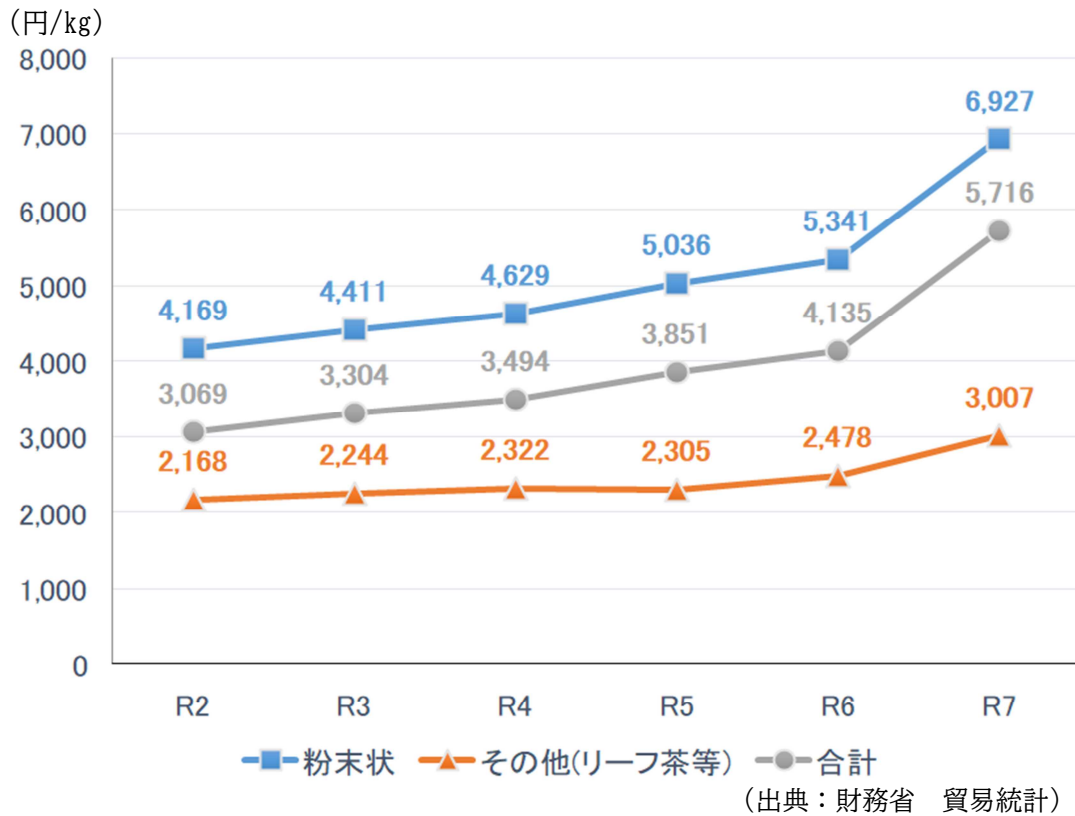
- ・ 世界における健康志向や日本食への関心の高まりを背景に、緑茶の輸出量及び輸出額は大幅に伸びています。
- ・ 令和7年は、輸出量は1万2,612トンと71年ぶりに1万トンの大台に乗り、輸出額は721億円と過去最高を更新しました。

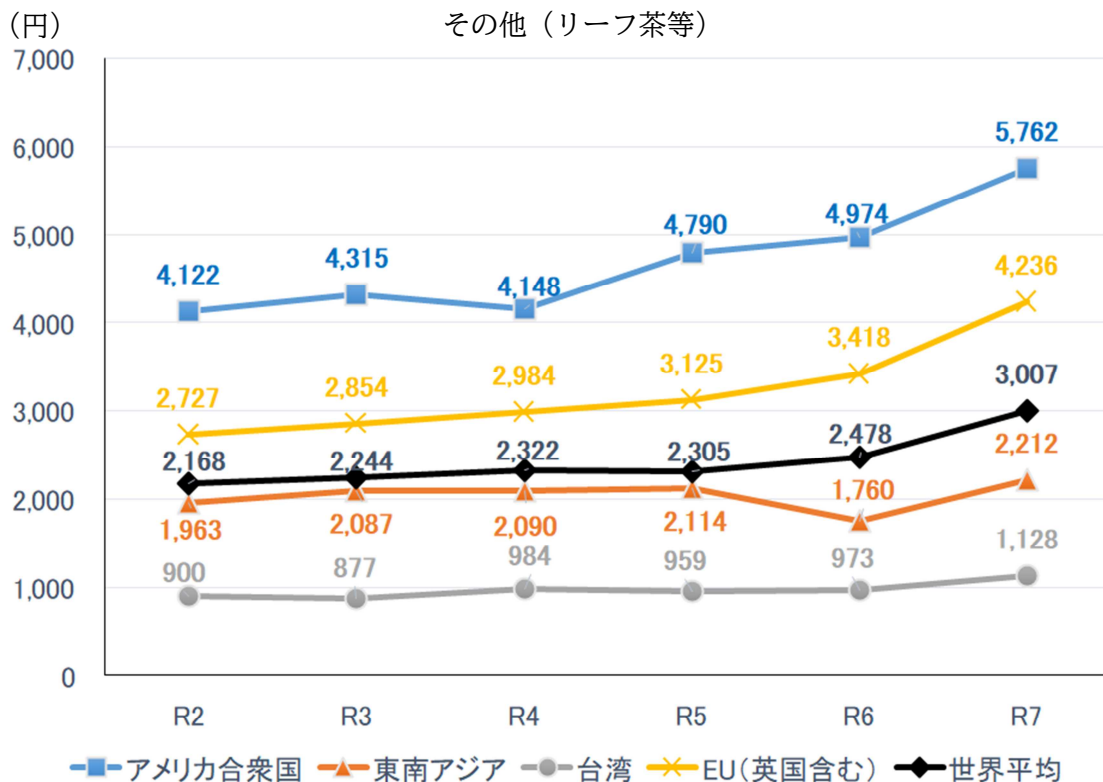


(出典：財務省 貿易統計)

(2) 緑茶の輸出価格

- ・ 緑茶の輸出価格は上昇傾向にあり、特に抹茶を含む「粉末状の緑茶」の上昇が顕著で、「その他（リーフ茶等）」の2倍以上の価格となっています。
- ・ 欧米向けの輸出価格は高めであるのに対し、アジア圏（東南アジア、台湾）向けの輸出価格は比較的低い状況となっています。



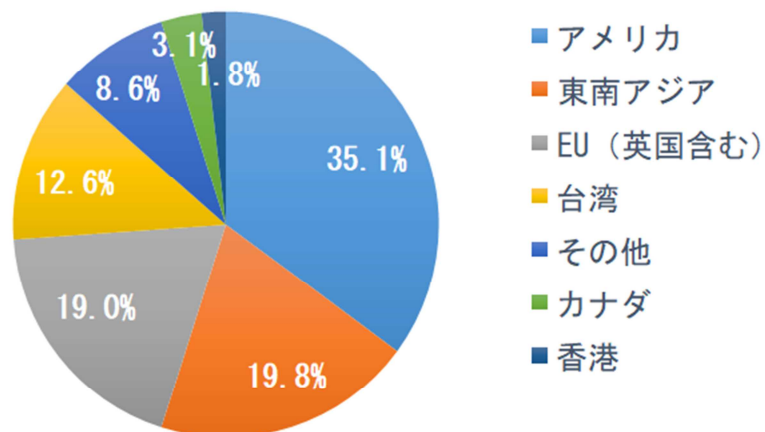


(出典：財務省 貿易統計)

(3) 輸出先の国・地域別内訳

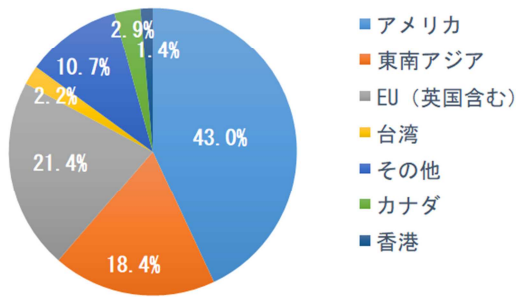
- 令和7年の輸出先の国・地域別では、米国が最も多く、全体の輸出量の35%を占めています。次いで東南アジア、EU（英国を含む）、台湾となっています。
- 粉末状の茶は米国が最も多く、次いでEU（英国を含む）、東南アジア、となっています。
- その他（リーフ茶）は台湾が最も多く、全体の約4割弱を占めています。

【輸出先国・地域別輸出量シェア（令和7年）】
輸出全体12,612トン

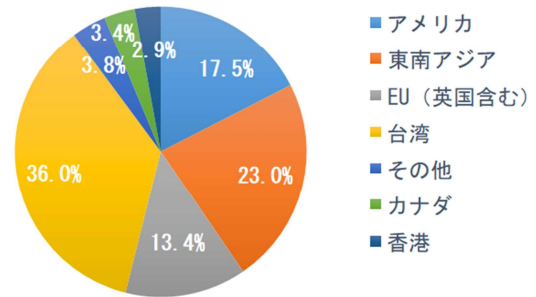


(出典：財務省 貿易統計)

うち粉末状の茶 8,718トン



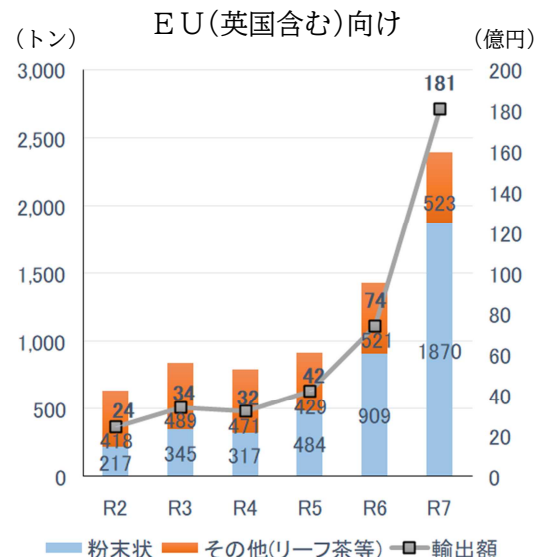
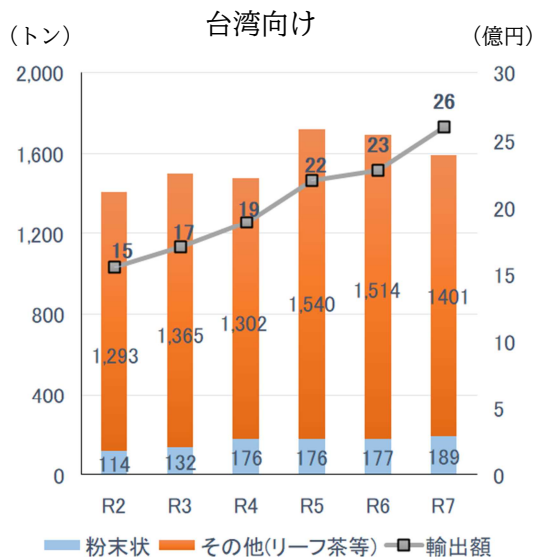
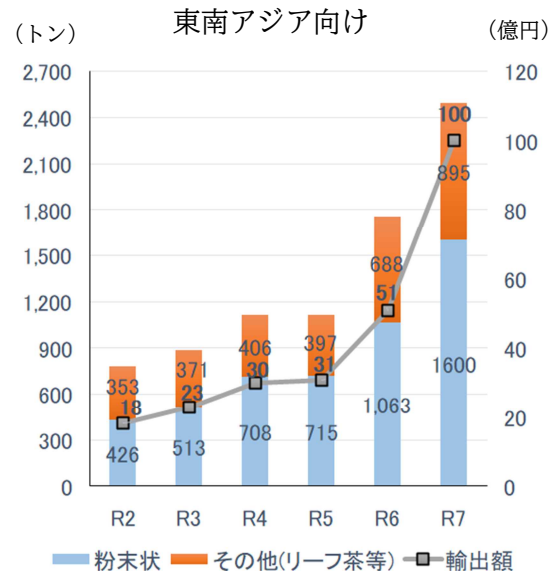
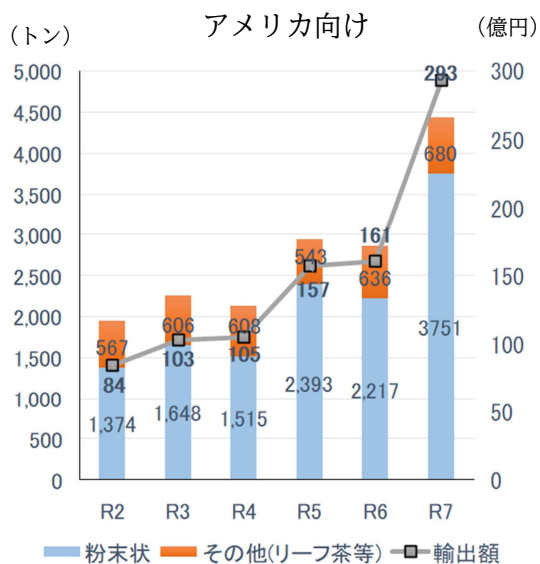
うちその他(リーフ茶等) 3,894トン



(出典：財務省 貿易統計)

(4) 主要輸出先の実績

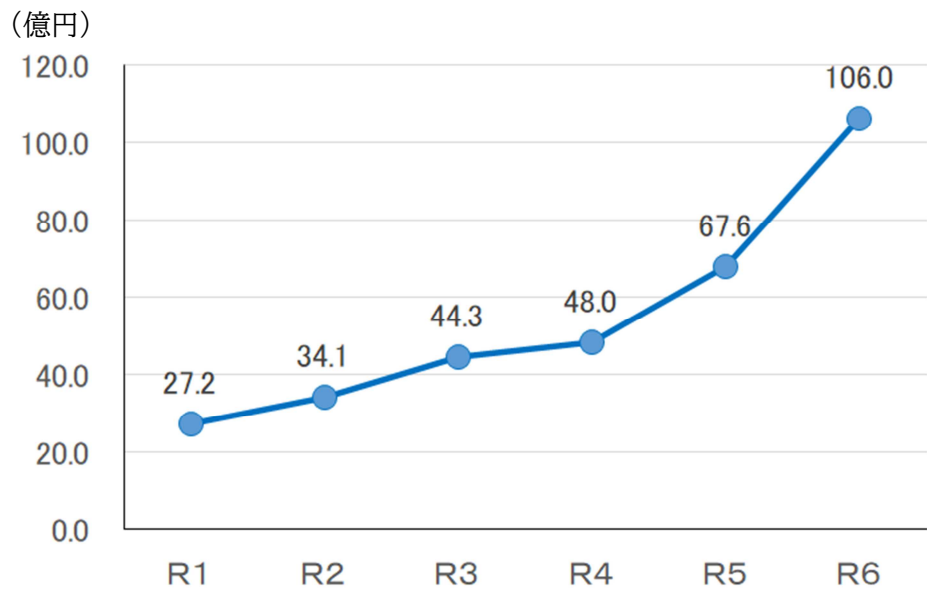
- ・ 米国向けは抹茶を含む粉末状のお茶が約8割を占めています。
- ・ 台湾向けはその他(リーフ茶等)が約9割を占めるなど、輸出先国・地域によって差があります。
- ・ 輸出額は、主要国全てで伸びており、特に東南アジア、EU(英国を含む)で伸びが顕著となっています。



(出典：財務省 貿易統計)

(5) 県内事業者の茶輸出額の推移

- ・ 世界的な日本茶の人気、健康志向の高まりにより、県内事業者の輸出額は年々増加しています。
- ・ 特に直近2年間で倍以上（R4：48億円→R6：106億円）と大幅に伸びており、輸出が急激に拡大しています。



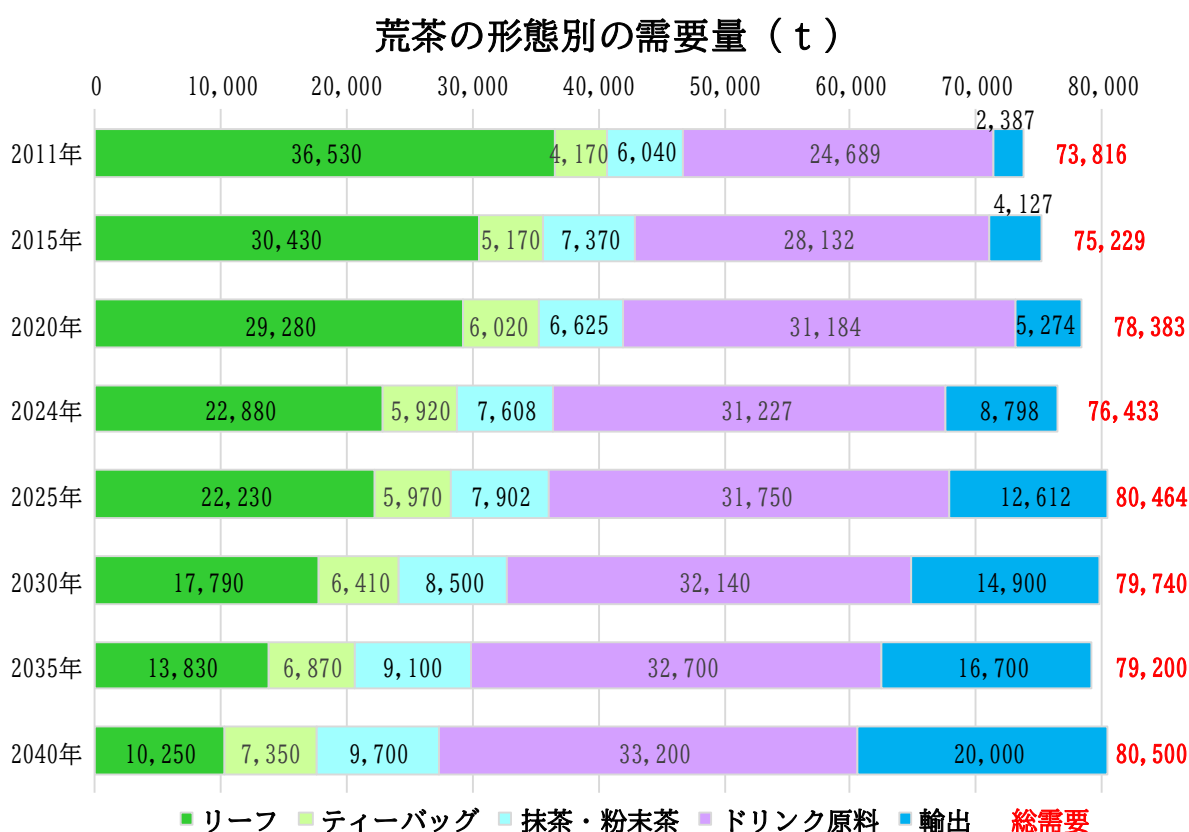
(出典：県マーケティング課)

(Ⅱ) 国内における今後の緑茶の需給予測（静岡県による試算）

1 需要量の予測（すう勢）

(1) 形態別の予測

- ・ リーフ茶の需要量は、ライフスタイルの変化や人口減少等により、今後も現状から減少することが予測されます。
- ・ 手軽に飲むことができるティーバッグ、抹茶・粉末茶は市場が拡大傾向であることから、需要量は増加すると見込まれます。
- ・ ドリンク原料の需要量は、茶系飲料の生産量が少しずつ増加していることや、1人当たりの購入量が増加傾向であることから、微増すると見込まれます。
- ・ 緑茶の輸出は、輸出向け茶葉の生産供給力の強化や、輸出先国の拡大等により、今後も堅調に伸びていくことが予想されます。

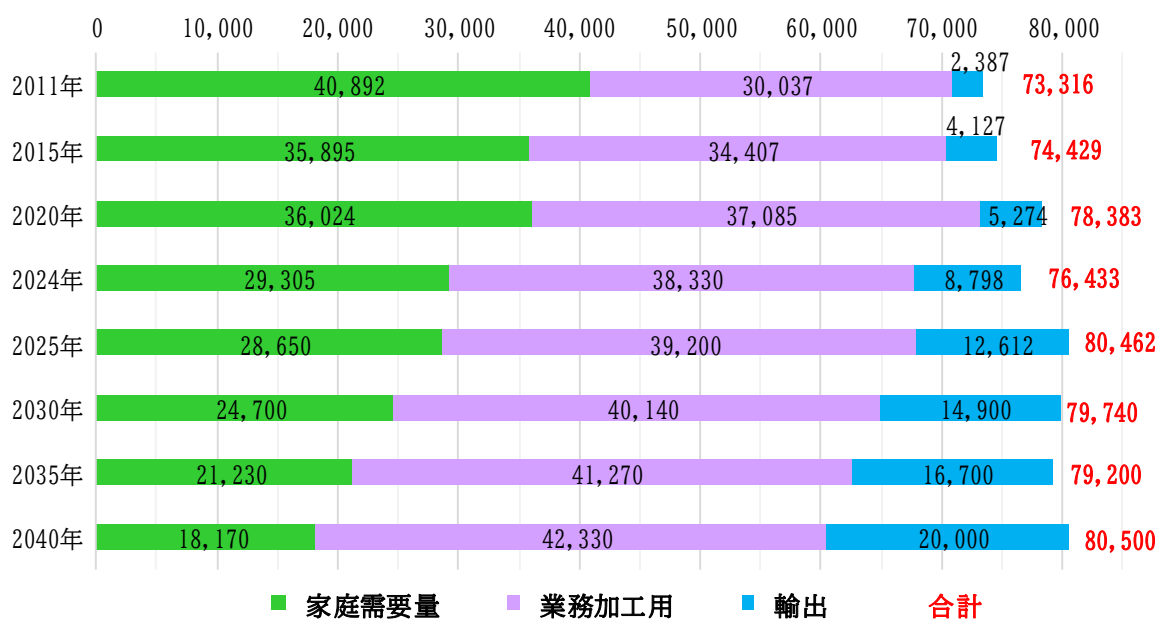


（資料：県お茶振興課推計）

(2) 利用先別需要予測

- ・ 家庭における需要は、急須で淹れる高齢者層や人口全体の減少等に伴い、減少することが予測されます。
- ・ 業務加工用の需要は、加工用の抹茶・粉末茶、ドリンク原料需要の拡大が見込まれることから、増加することが予測されます。
- ・ 輸出量は、海外において抹茶が定番化しつつあることや、輸出先国の拡大等により、今後も増加していくことが見込まれます。

荒茶の利用先別需要量の予測（t）

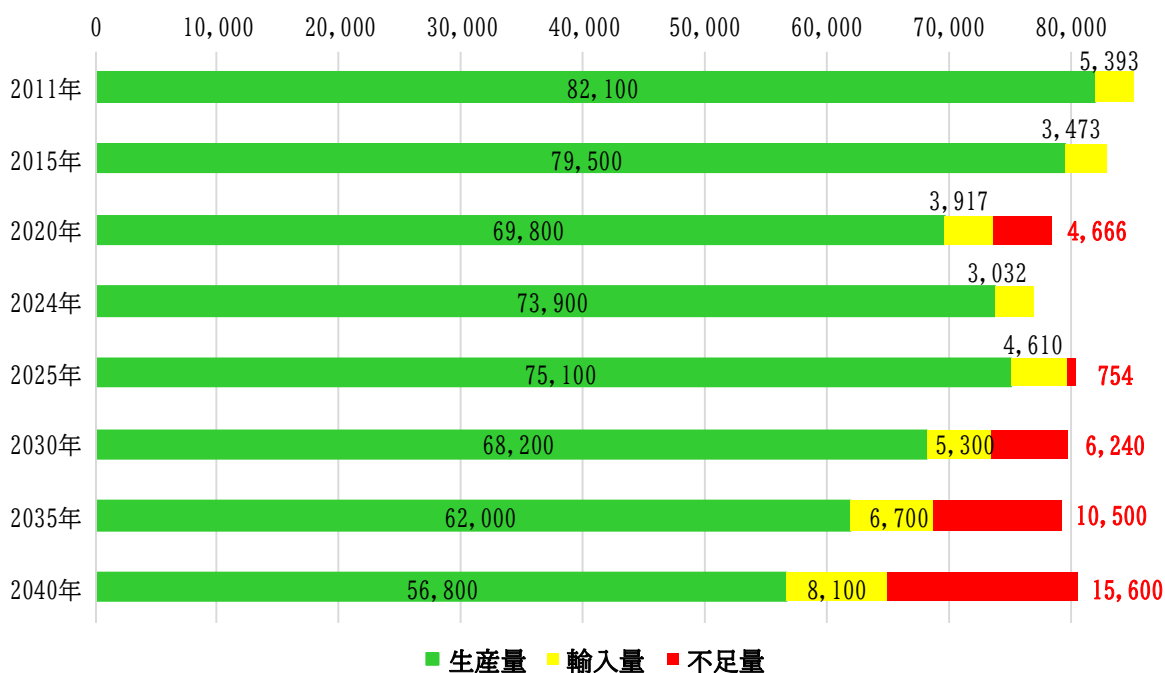


（資料：県お茶振興課推計）

2 需給バランス予測

- ・ 輸入量は、国内生産量の減少に伴い、緩やかに増加していくことが見込まれます。
- ・ 担い手不足や茶園面積の減少傾向は今後も続くと想定されることから、生産量は減少していくことが見込まれます。
- ・ 需要量よりも供給量が下回り、2040年には15,600トン程度不足すると予測されます。

緑茶の供給量と需要比較（t）



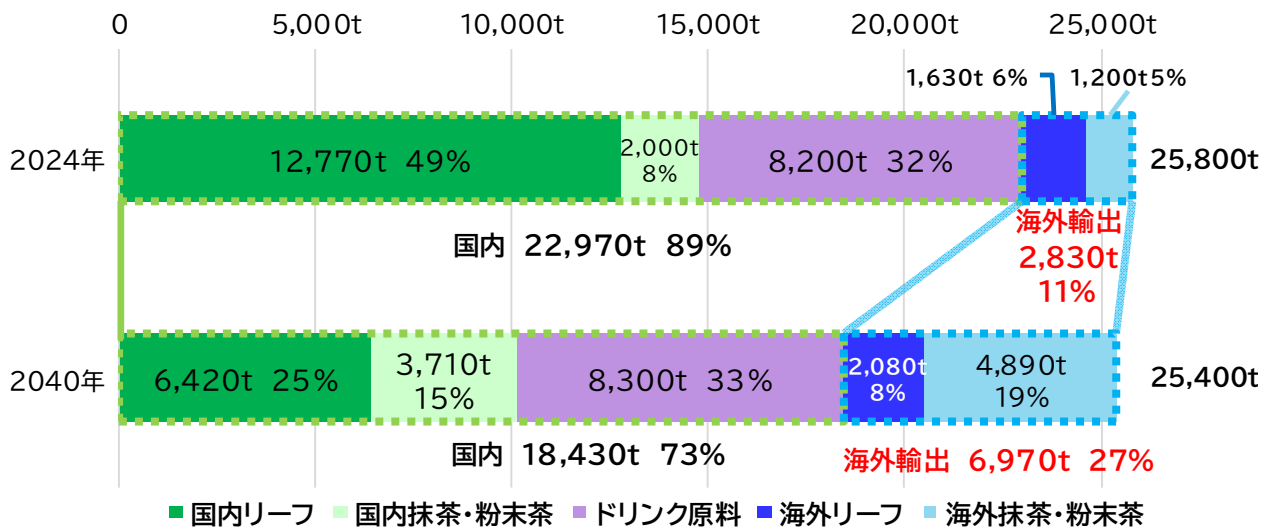
（資料：県お茶振興課推計）

II 本県茶業の目指す姿

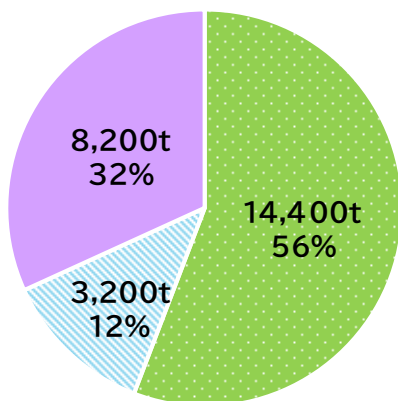
静岡茶の本来価値を発信し、世界で愛され、稼げる茶業へ
 ～世界から選ばれる静岡茶を目指して～

- ・国内のリーフ茶の需要が減少する一方、抹茶・粉末茶を中心に海外需要は急速に拡大しています。この需給構造の変化を的確に捉え、本県茶業は、煎茶・ドリンク原料・輸出など多様な需要に対応した生産構造へと戦略的に転換を図っていきます。
- ・多収性・被覆適応性のある優良品種への転換を進めるとともに、茶園の集積・基盤整備を一体的に推進し、需要に対応した茶葉の生産体制を強化していきます。
- ・あわせて、静岡茶の高い品質や生産技術、歴史、文化といった本来価値を世界にわかりやすく発信し、グローバルブランドを確立していきます。
- ・ハード面とソフト面の両面から施策を展開することで、世界から選ばれる静岡茶を実現し、「稼げる茶業」の確立を目指します。

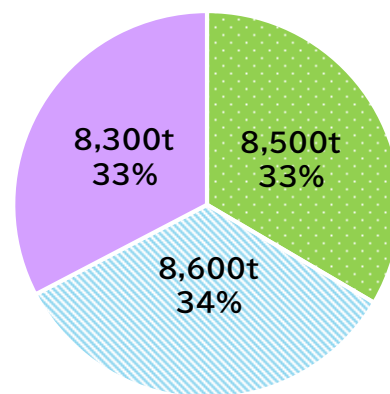
目指す生産構造



2024年



2040年



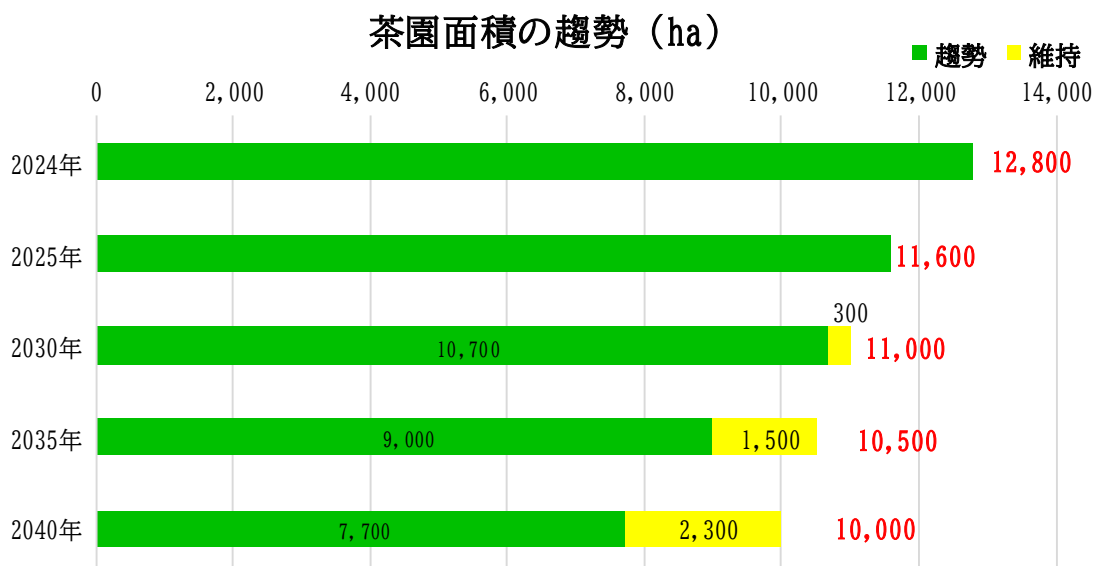
■ リーフ ■ 抹茶・粉末茶 ■ ドリンク原料

(資料：県お茶振興課推計)

Ⅲ 静岡県の生産体制の姿

(Ⅰ) 茶園面積

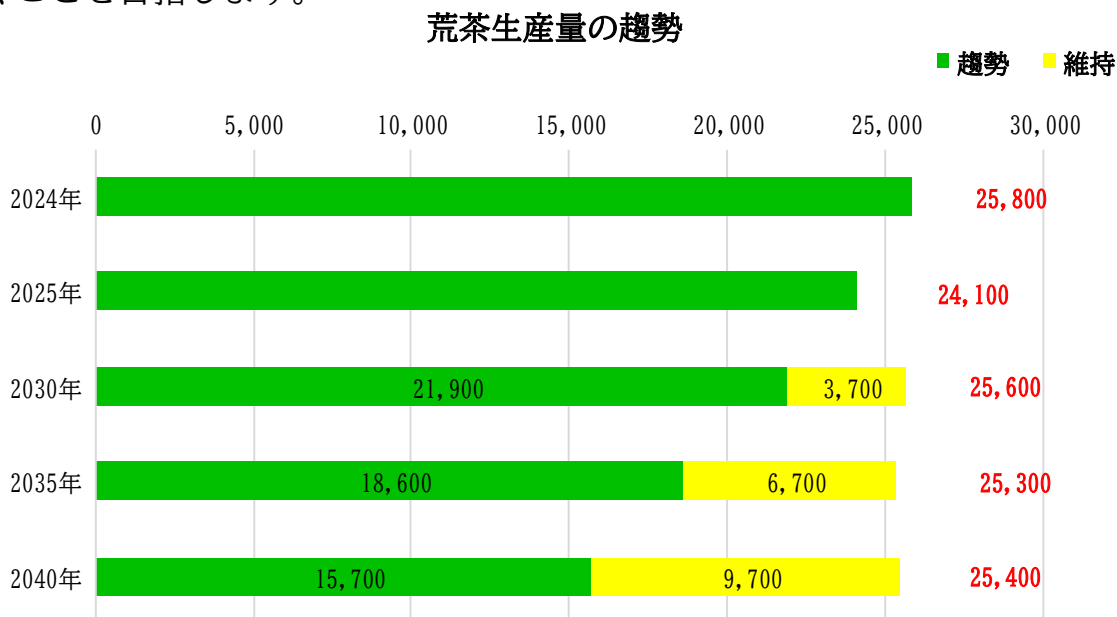
- ・ 茶園面積は担い手の高齢化や後継者不足により、条件の悪い茶園を中心に、2040年には7,700haに減少することが見込まれます。
- ・ 担い手への集積や、輸出など需要に対応した生産構造への転換等を促進し、茶業経営体の経営改善を促すことで、10,000haの茶園を維持することを目指します。



(資料：県お茶振興課推計)

(Ⅱ) 荒茶の生産量

- ・ 担い手の高齢化や後継者不足により、荒茶生産量は今後も減少していくことが見込まれます。
- ・ 多収性品種への転換や、年間を通じた生産を行うことで、単位面積当たりの荒茶生産量を増加させ、年間の所得を確保し、生産量を維持していくことを目指します。

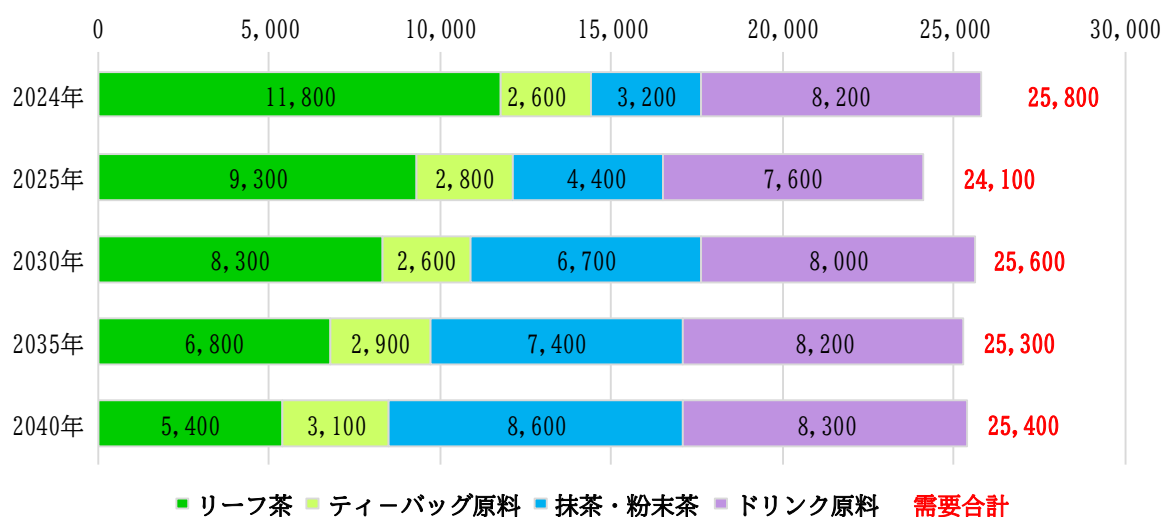


(資料：県お茶振興課推計)

(Ⅲ) 荒茶の形態別の生産量

- ・ リーフ茶は、ライフスタイルの変化等により今後も需要の減少が見込まれますが、高級煎茶から日常使いの茶まで、需要に応じた品質や価格帯の茶を供給できるように、生産量を維持します。
- ・ 抹茶・粉末茶は、今後も輸出は伸びていくことが見込まれることから、輸出需要に対応した生産体制を強化し、荒茶生産量全体の3分の1程度まで生産拡大することを目指します。
- ・ ドリンク原料茶については、今後も堅調な需要が見込まれることから、平坦地域を中心に多収性品種への転換を進め、面積当たりの生産量を拡大し、生産量の維持を図ります。

本県の荒茶の形態別の目標生産量（t）



（資料：県お茶振興課推計）

茶業振興施策の目標値

(1) 成果指標

指標	現状値(R 6)	目標値(R 10)
県内事業者の茶輸出額	1 0 6 億円	1 5 4 億円

(2) 活動指標

指標	現状値(R 6)	目標値(R 10)
多様な需要に対応した 優良品種※1への転換	2 3 0 h a	累計 4 1 8 h a
輸出需要に対応した茶 生産への転換面積※2	0 h a	累計 3 2 0 h a
Cha0I プロジェクトによ る茶の新たな価値の創 造と需要の創出	2 2 件	累計 8 0 件

※1…「つゆひかり」「しずかおり」「香駿」「ゆめするが」「しずゆたか」
「ゆめすみか」の栽培面積の合計

※2…輸出拡大生産体制強化支援事業により転換された輸出向け茶園面積

Ⅲ 茶業振興策

基本方向1 茶業の構造改革による生産力の強化

<現状と課題>

本県茶業は、生産者の高齢化や担い手不足、価格低迷等により、生産基盤の弱体化が進んでいます。特に、茶園が小区画で分散している地域が多く、作業効率が低いことが、生産性向上や経営の安定化を阻害する大きな要因となっています。

一方、抹茶や有機茶、特徴のあるお茶などの需要は拡大し、需要に対応した生産構造への転換が求められていますが、現在の生産体制では十分に対応できていない状況にあります。さらに、気候変動による影響と見られる生産量の減少など、生産現場を取り巻く環境は厳しさを増しています。

<施策の方向性>

需要の変化を的確に捉えた生産への転換を進めるとともに、茶園の基盤整備・改植・集積を一体的に推進することで、小区画・分散型の生産構造から、効率的で持続可能な生産構造への転換を図ります。あわせて、スマート農業の導入や気候変動への対応を進め、「稼げる茶業」の構築に向けた構造改革を推進します。

R 7	R 8	R 9	R10
■ 品種転換等によるてん茶や有機茶の生産拡大 (輸出需要に対応した茶生産への転換面積 / 現状値：R6 0ha)			
80ha	累計 160ha	累計 240ha	累計 320ha

R 7	R 8	R 9	R10
■ 品種転換・栽培技術の開発等によるてん茶や有機茶の生産拡大			
輸出需要に対応した品種/栽培体系への転換、機械施設等の導入支援			
てん茶や有機茶の栽培技術向上に向けた指導・研修会の開催等			
優良品種の有機栽培体系の開発・普及			
■ 多様な需要に対応した優良品種への転換 (多様な需要に対応した優良品種の栽培面積 / 現状値：230ha)			
277ha	324ha	371ha	418ha

R 7	R 8	R 9	R 10
■ 技術支援による有機農業の拡大			
有機栽培マニュアルの作成	有機栽培の普及		
有機農業に取り組む人材育成			
有機茶多収生産技術の開発			

R 7	R 8	R 9	R 10
■ Cha0Iプロジェクトによる茶の新たな価値の創造と需要の創出			
(商品化支援件数・販路開拓支援件数 / 現状値 : R6 22件)			
20件	累計 40件	累計 60件	累計 80件

R 7	R 8	R 9	R 10
■ 茶業研究センターにおける先端技術を活用した育種、栽培、新商品開発強化			
茶業研究センターの整備	共同研究開発支援		
	製品化・販路開拓支援		

1 需要に対応した生産への転換による「稼げる茶業」の構築

(1) 多様な需要に対応した茶生産体制の強化

抹茶や有機茶、特徴のあるお茶など、国内外で多様化する需要に対応するため、用途や品質に応じた茶生産体制への転換を進めます。

実需者や茶商との連携を通じて需要動向を的確に把握し、生産現場へ反映させることで、需要に即した生産を推進します。

あわせて、“つゆひかり”や“しずゆたか”といった需要に対応した優良品種への改植を進め、多収かつ付加価値の高い茶生産を進めることで、価格変動に左右されない強い経営体質の確立を図り、「稼げる茶業」への転換につなげます。

- ・多収性、被覆適応性品種など需要に対応した品種への転換
- ・年間を通じた摘採による生産量の確保
- ・用途や品質に応じた茶園管理(手摘み・ティーバッグ用、ドリンク用など)
- ・複数の売り先を確保し、リスクを分散

(2) 茶園の基盤整備、集積・集約化

地域計画に基づき、小区画で分散した茶園が多い本県の実情を踏まえ、作業効率の向上と経営の安定化につながる大規模化を進めます。

将来の担い手や農地の利用方針を明確化した上で、輸出生産拠点への原料供給を見据え、担い手や法人への集積を前提とした茶園の基盤整備や改植を計画的に推進します。また、区画整理や園地条件の改善を通じて、機械作業に適した茶園への再編を進め、省力化と生産性向上を図ります。

あわせて、管理が行き届かなくなった茶園については、再生・集積・利用転換を進め、荒廃の防止と生産基盤の回復を図るとともに、共同管理や共同摘採、作業受委託等の取組を組み合わせ、地域全体で茶園を維持・活用する体制を構築することで、「使われ続ける茶園」を確保します。

- ・区画の拡大、平坦化、集積・集約化による生産コストの低減
- ・乗用型機械の導入による作業の省力・効率化
- ・低コスト化と効率化による収益力の向上

(3) 有機栽培への転換の推進

緑茶の主な輸出先の一つである欧州では、環境配慮や持続可能性を重視する傾向があり、有機農産物が評価される市場環境が形成されております。こうした市場特性を踏まえ、有機茶の生産から流通・輸出までを一体的に強化する取組を進めます。

- ・有機適性のある品種への転換の促進
- ・有機茶栽培技術の向上に向けた技術指導の強化

(4) スマート農業の導入等による省人・省力化

深刻化する労働力不足に対応するため、センサーやデータを活用した茶園管理など、スマート農業技術の導入を進めます。特に、大区画化や基盤整備を進めた茶園と組み合わせることで、摘採や施肥、防除などの作業効率を高め、労働負担の軽減と生産性向上を図ります。

実証を通じて効果を確認した技術については、現場での導入を促進し、定着を図るとともに、データを活用した栽培管理により、品質の安定化やコスト低減を進め、将来にわたり安定した茶生産を目指します。

- ・AIを用いた茶園管理作業及び人員配置の最適化
- ・気象データや品種別生育データを活用した摘採適期の可視化
- ・大区画茶園における機械化体系の実証
- ・ドローンを活用した防除・土壌診断を活用した精密管理

(5) 気候変動等のリスクへの対応の推進

気候変動の進行により、高温障害や凍霜害など、茶生産を取り巻くリスクが顕在化していることから、耐暑性や耐病性に優れた品種への転換や、栽培技術の改善を進めるとともに、防霜対策や生育管理技術の高度化を図ります。

また、気象情報等を活用した栽培管理の普及を進め、リスクの早期把握と適切な管理により、気候変動下においても安定した茶生産を確保し、生産者の経営リスクの低減と産地の持続的発展につなげます。

- ・耐暑性や耐病性に優れた品種への転換
- ・防霜対策や生育管理技術の高度化

2 オープンイノベーションによる新たな価値の創造

(1) ChaOI プロジェクトによる新たな価値の創造と需要の創出

ChaOI プロジェクトを通じて、異業種やスタートアップ等との連携を促進し、茶の新たな価値創造と需要創出を進めます。食品、健康、観光など多様な分野との連携により、茶の新たな利用方法や商品、サービスの創出を図り、従来の茶需要にとどまらない市場の拡大につなげることで茶業の可能性を広げ、産地の活性化と付加価値創出を図ります。

(2) ChaOI-PARC（茶業研究センター）を核とした先端技術開発

ChaOI-PARC を核として、遺伝資源や DNA 解析等の先端技術を活用した茶の品種開発を戦略的に推進します。また、抹茶や有機茶など需要拡大分野に対応し、品質特性に加え、耐暑性・耐病性を備えた新品種の育成を進めるとともに、現地実証を通じて早期普及を図ります。

あわせて、スタートアップ等と連携し、スマート農業技術の開発・実証を進め、省人・省力化や生産性向上につなげるなど、研究成果を確実に生産現場へ定着させることで、生産力強化と高付加価値化を一体的に推進します。

- ・オープンイノベーションによる新商品開発や販路開拓
- ・耐暑性・多収性品種の戦略的育種と転換モデルの確立
- ・気象・成分データに基づく品質安定化技術の高度化
- ・有機・環境配慮型栽培体系の確立

基本方向2 輸出拡大と供給力の強化

<現状と課題>

国内のリーフ茶の需要は減少傾向である一方、海外市場では健康志向の高まりや日本食文化への関心を背景に、抹茶をはじめとする緑茶需要が拡大しています。一方、本県では、輸出向け茶葉の生産量や品質を安定的に確保する体制が十分とは言えず、需要拡大の動きを適確に対応できていない状況にあります。また、輸出を前提とした生産・加工・供給体制が必ずしも確立されておらず、供給量の不安定さや品質のばらつきが課題となっています。

さらに、各国の制度や品質基準への対応、商談や物流への対応など、輸出に伴う負担が大きく、需要拡大の動きを十分に盛り込めていない状況にあり、輸出を持続的に拡大していくためには、輸出需要に対応した生産体制・供給力の強化が急務となっています。

<施策の方向性>

輸出需要の拡大を確実に捉え、静岡茶を成長軌道に乗せるため、抹茶や有機茶を中心とした輸出向け生産体制の強化を進めるとともに、生産から加工までを一体で担う輸出生産拠点の形成を推進し、輸出需要に対応した荒茶供給体制を構築することで、品質・数量の両面で安定した供給力を確保します。

あわせて、海外市場の特性を踏まえた販路開拓を継続的に進めるとともに、輸出に取り組む事業者を支える体制を強化し、新規参入から継続・拡大を志向する事業者まで一貫して後押しすることで、静岡茶の持続的な輸出拡大を図ります。

R 7	R 8	R 9	R 10
■ 輸出生産拠点の拡大 (輸出向け荒茶生産量：R10目標 3,408 t)			
てん茶や有機茶の栽培技術指導・生産者や茶商とのマッチング等			
経営モデル拠点工場 選定	経営モデル拠点工場への 関係機関が連携した集中支援		経営モデル拠点工場 の横展開

(再掲)

R 7	R 8	R 9	R 10
■ 品種転換等によるてん茶や有機茶の生産拡大			
(輸出需要に対応した茶生産への転換面積 / 現状値：R6 0ha)			
80ha	累計 160ha	累計 240ha	累計 320ha

1 輸出需要に対応した生産体制強化

(1) 品種転換等によるてん茶や有機茶の生産拡大

拡大する海外需要に対応するため、てん茶向け品種への転換や被覆栽培の導入を計画的に進め、抹茶原料となるてん茶の生産拡大を図ります。また、海外市場で評価の高い有機茶については、安定的な生産を可能とする有機栽培体系の確立と、生産拡大に向けた取組を進めます。

(2) 輸出生産拠点の拡大と支援

輸出に取り組む茶工場を核として、茶の生産から加工までを一体で担う輸出生産拠点の形成を進めます。あわせて、てん茶や有機栽培茶の品質向上のため、関係機関と連携して栽培技術支援を行うとともに、輸出向け茶葉の製造に必要な設備整備の充実を支援します。

また、個々の事業者による対応にとどまらず、地域全体で輸出を支える体制を構築して担い手不足を補い、産地としての供給力と信頼性の向上を図ります。

中長期的には、国内向け煎茶工場を含めた地域の茶工場の機能分担を進め、茶工場の再編集約・合理化を進めていきます。

2 海外市場の開拓の推進

(1) 海外販路開拓の推進

海外市場における静岡茶の認知度向上と販路拡大を図るため、海外展示会への出展や現地での情報発信を継続的に進めます。また、単発的な取組に終わらせることなく、国や地域ごとの嗜好、用途、流通構造を踏まえ、実需者との継続的な関係構築を促進することで、安定した取引を獲得し、静岡茶の評価向上と輸出の定着を図り、持続的な市場形成につなげます。

(2) 輸出に取り組む事業者へのサポート体制強化

輸出に取り組む事業者が直面する各国の制度への対応、品質管理、商談や物流に関する課題に対処するため、米国・欧州・アジア各国の流通に精通したサポートデスクを設置し、輸出事業者への支援を継続します。事業者の取組段階や輸出先の特性に応じた支援を行い、新規参入から継続・拡大までを一体的に後押しするとともに、現地市場の最新情報を提供し、事業者が継続して輸出に取り組める環境を整え、産地全体としての輸出基盤の強化につなげます。

基本方向3 静岡茶のブランド構築と文化の継承

<現状と課題>

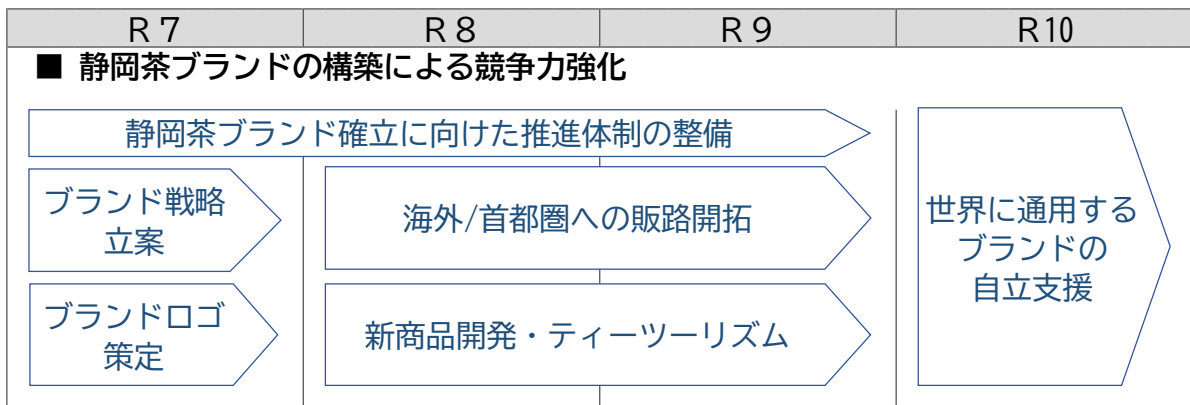
静岡茶が将来にわたって発展していくためには、生産量や価格競争に依存した産地構造から脱却し、「世界に通用するブランド」としての価値を確立していくことが重要となっています。本県は、茶産地として長い歴史と実績を有する一方、海外における認知度や評価は必ずしも十分とは言えず、産地としての価値が適切に伝わっていない状況にあります。

また、消費者の価値観が多様化する中、品質や価格だけでなく、産地の背景にある歴史や文化、環境との関わり、体験を含めた価値の発信が求められています。これらを伝える取組は十分とは言えません。さらに、世界農業遺産「静岡の茶草場農法」や国登録無形文化財「手揉み製茶」など、静岡茶を支えてきた文化や伝統技術については、担い手の高齢化や後継者不足が進行しており、文化の継承と茶業の経済的価値向上を両立させることが大きな課題となっています。

<施策の方向性>

世界に通用する静岡茶ブランドの構築を目指し、戦略的な情報発信と魅力ある消費体験の創出を通じて、ブランド価値の向上を図ります。また、単なる商品の発信にとどまらず、静岡茶が育まれてきた歴史や文化、環境との関わり、持続可能な生産背景を含めて発信することで、国内外における認知度を高め、共感と信頼を獲得していきいます。

あわせて、茶草場農法や手揉み製茶といった文化的資産を次世代へ確実に継承し、ふじのくに茶の都ミュージアム等を拠点とした情報発信を強化することで、文化の振興と茶業の発展を一体的に進め、これにより、茶業、地域産業、観光が融合する静岡茶ブランドの価値向上と消費拡大、産地の持続的発展につなげるとともに、静岡茶を通して県民のウェルビーイング向上の実現を目指します。



1 世界に通用する静岡茶ブランドの構築による競争力強化

(1) 世界に向けた戦略的なプロモーションの展開

「静岡茶ブランディングプロジェクト」において明確にした、静岡茶の特長や長年培われた栽培・加工技術、歴史・文化の価値を発信し、世界に向けて「静岡県が日本のリーディング産地」であることを明確に打ち出す情報発信を進めます。

海外展示会出展や世界お茶まつり、デジタル媒体等を戦略的に活用し、市場や用途ごとの関心に応じた発信を積み重ねることで、海外市場において「静岡茶」という名称が品質や信頼と結び付き、認知度と評価を高め、グローバルブランドの地位確立と輸出競争力の優位性向上を目指します。

(2) 高付加価値化ティーリズムなど魅力ある消費体験の創出

「富士山に見える茶園の中のテラスで至高の一杯を味わう」といった静岡茶の魅力を感じられる消費体験を創出し、静岡茶への理解と評価を深めるとともに、産地を訪れる価値を高め、来訪者自身の体験が国内外への情報発信へと波及し、産地としての高付加価値化に寄与する取組として発展させます。

(3) 顧客接点の拡大に向けたマーケティング強化

世界市場における消費動向や市場の変化を的確に把握し、顧客接点の拡大を図ります。また、海外市場を含めた需要動向を踏まえ、得られた情報を生産者や茶商等の関係者間で共有し、生産量や茶種等を調整することで、計画的な生産や商品展開につなげ、需給の安定化とブランド価値の維持・向上を目指します。

2 茶の文化の振興と理解の増進

(1) 世界農業遺産「静岡の茶草場農法」の維持・継承

静岡の茶草場農法は、高品質な茶と生物多様性保全を両立した農業システムとして世界農業遺産に認定されており、茶草場農法の維持・継承に向け、地域における取組を支援し、環境と調和した茶生産の価値を次世代へ引き継いでいきます。生物多様性の保全と茶業の両立という特長を分かりやすく発信し、国内外における理解と評価の向上を図ります。あわせて、担い手の確保や継続的な管理体制の構築を進め、地域資源としての茶草場農法を将来にわたり維持します。

(2) 「ふじのくに茶の都ミュージアム」による茶の魅力・歴史・文化の発信

ふじのくに茶の都ミュージアムを、静岡茶ブランドを国内外に発信する中核拠点として位置付け、展示や体験を通じて茶の魅力、歴史と文化(茶箱や蘭字など)を総合的に伝えていきます。また、インバウンドの増加を見据え、多言語対応や分かりやすい解説を充実させるとともに、観光や産業、輸出、ブランド施策と連動した情報発信を強化します。あわせて、茶箱や蘭字などの輸出の歴史・文化的資料を活用し、静岡茶が海外との交流の中で培ってきた歴史や文化、ブランドとしての価値についても発信してまいります。

また、単なる展示施設にとどまらず、静岡茶の価値を「知る」「体験する」「発信する」場として機能させることで、来館者の理解と関心を高め、世界における静岡茶の認知度向上につなげます。

(3) 静岡茶の愛飲の促進

「小中学校の児童生徒の静岡茶の愛飲の促進に関する条例」に基づき、県民や若い世代を中心に、日常生活の中で静岡茶に親しむ機会を拡充し、安定した消費基盤の形成を図ります。学校や地域と連携した取組を通じて、静岡茶の味わいや背景に触れる機会を創出するとともに、生活スタイルの変化に対応した飲用提案を進めます。

また、家庭や職場、地域行事など日常生活の様々な場面で静岡茶が自然に選ばれる環境づくりを進めることで、継続的な愛飲習慣の定着を図ります。こうした取組を通じて、次世代への文化継承と需要の下支えを両立させ、産地としての持続的発展につなげます。

(4) 国登録無形文化財「手揉み製茶」の継承

令和6年に国の登録無形文化財に登録された「手揉み製茶」を次世代へ確実に継承するため、手揉み製茶の保存活動や後継者育成を支援し、伝統技術の継承を進めます。

実演や体験の機会を通じて、その技術的価値や文化的意義を国内外に広く伝えるとともに、次世代への継承につなげることで、静岡茶の文化的価値を将来にわたり守り、産地の魅力向上に寄与します。